

# 患者図書室／患者情報室の資料の選定に関する研究

## 1. 目的

近年、病院の中に「患者図書室」、「患者情報室」といった患者のための医療情報提供施設が設置され始めている。公共図書館の中にも「医療情報コーナー」を設けるところがある。市民・患者の医療情報ニーズにより、これらの動きは更に大きくなっていくことが考えられる。また、2007年4月に施行されたがん対策基本法により、がん診療拠点病院の患者に対する情報提供機能が必要性を増してきていることも、このような情報提供場所の設置の動きを加速させるだろう。

しかし、このような医療情報提供施設の情報の「質」にはばらつきがある。書籍の数では多いところでは医学書1000冊以上を取り揃えている一方で、医療情報提供を謳っているものの一般書がメインとなっている施設もある。また、中身についても、医学事典や教科書などの専門向けの書籍、病気や検査について分かりやすく解説した市民・患者向けの書籍、闘病記やエッセイなどの読み物など、様々である。書籍以外にも、患者会資料、製薬会社のパンフレット、ビデオやDVDなどの視聴覚資料など多くの種類での提供方法もある。

本研究では、各施設の資料データを収集し、その中から、多くの施設に置かれている資料、よく利用されている資料は何か、逆に足りない資料は何かを調査する。更に、その調査の中から、これから医療情報提供施設を作る際に一助となるような「役に立つ資料」のリストを作成する。

## 2. 方法

郵送によるアンケート調査を行った。ただし、いいなステーションのホームページ上<sup>1</sup>からもアンケート用紙をダウンロードして、メールで返信が可能なようにした。アンケートの内容については別添資料を参照されたい。

アンケートは108の施設に配布した。内訳は病院が98施設、公共図書館が2施設、その他の施設が8施設であった。55施設から返答を得た（回収率51%）。そのうち、アンケートの有効数は39（全体の36%）であった。医学情報の提供を積極的に行っていない、アンケートに答えられるほどの資料がない、などが無回答の理由であった。

書籍など施設に設置している資料のリストも同時に収集したが、この回収数は31（29%）であった。リストを提供できない理由としては、現在作成中、Webで公開しているのでそちらを参照して欲しい、などであった。

---

<sup>1</sup> <http://www.e7station.com>

### 3. 結果

(明記がない箇所は n=39、表中の数字は施設数)

#### ○目録の公開について

全て公開している	8
一部のみ公開している	4
作成しているが公開していない	18
作成していない	7
その他	2

目録の公開については公開している施設が 12 施設(全てと一部を足したもの、31%)、作成しているが公開していない施設が 18 施設 (46%)、作成していない施設が 7 施設 (18%)、で作成しているが公開していない施設が多かった。OPAC やインターネット上

で公開しているという施設もあった。

#### ○本の選定者 (複数回答)

司書	18
医師	14
担当の委員会	16
その他	17

本の選定者は司書が 18 施設 (46%)、委員会に入っている施設も含めると半数以上を占めていた。本の選定には司書が重要な役割を担っていると言える。医師も 14 施設 (36%) と比較的多く、後の「寄贈本につ

いての取り扱い」についても、医師に意見を求めるという意見が多かった。委員会を作っているところは 16 施設 (41%) で、委員の内訳は司書、医師、事務員などの意見があった。

その他の意見としては、担当のボランティアや事務職員という意見があった。

#### ○予算

100 万円以上	5
50 万～100 万円未満	1
10 万～50 万円未満	11
10 万円未満	2
その他	15
予算なし・無回答	5

予算については、100 万円以上のところ、20～30 万円のところ、必要なときにその都度購入 (その他に分類) という 3 パターンに大きく分かれた。最大は 350 万円で、医療情報提供の図書室と娯楽用の図書室が両方ある病院で、両方の予算を合算したものであった。

#### ○寄贈の受け付け (複数回答)

利用者から	27
病院スタッフから	35
受け付けていない	3

寄贈の受け付けは利用者からのものを受け付けている所が 27 施設 (69%)、病院スタッフからの寄贈を受け付けている所が 35 施設 (90%) と寄贈の受付をしている所

が多くを占めた。受け付けていない所は 3 施設 (8%) であった。

○リクエストの受け付け

受け付けている	20
受け付けていない	17
無回答	2

リクエストは受け付けている所が 20 施設 (51%) と半数を超えているが、受け付けていない所も 17 施設 (44%) と意見が分かれる結果となった。

○受け入れ基準

ある	22
ない	10
受け付けていない・無回答	7

寄贈やリクエストの基準がある所は 21 施設 (56%) であった。基準の内容は、古いもの・汚れのあるもの、偏りがあるもの (宗教的、特定の治療法・健康食品など)、

を避けるという回答が見られた。また、医学書については担当委員会や医師の判断を仰ぐという回答もあった。

○不足している資料

患者会	5
食事・栄養	4
闘病記	4
数が不足、全般的に	4
がん	3
リハビリ	3
耳鼻科	3
小児科	3
辞典	2
新しく更新したい	2
ガイドライン	2
脳神経	2
在宅ケア、パンフレット、患者向け解説書、乳房疾患、緩和ケア、医療費、医学専門書、看護系、整形外科、法律・制度、健康雑誌、検診、介護、眼科、皮膚科、アレルギー、呼吸器	1

不足している資料・これから補充したい資料については、20 施設からの回答があった。このうち、最も多かったのは、患者会の資料で 5 施設であった。次が闘病記や食事・栄養が 4 施設であった。全体的な数が不足しているという所 (4 施設) や新しい資料に更新したいという所 (2 施設) という全体の問題点を挙げた施設もあった。診療科別・病気別に見ると、がん、リハビリ、耳鼻科、小児科が 3 施設、脳神経が 2 施設など、意見が分かれた。

○よく使われる書籍（複数回答；回答数 32 施設；単位は冊）

医学事典	24
からだ・病気の解説（一般向け）	34
からだ・病気の解説（専門向け）	12
食事・栄養	18
薬	10
検査	10
健康	19
がん	47
消化器	7
循環器	7
呼吸器	2
脳神経	9
婦人科	3
小児科	4
整形外科	3
読み物・漫画	23
福祉・介護	3
その他	12

この項目については、該当する書籍 1 冊、もしくは 1 シリーズを 1 冊とカウントした。カテゴリーのみを記述している場合（「がんの書籍」など）も 1 とカウントした。また、利用ランキングを送って頂いた施設は直近のもののみをカウントした。

本の種類別で多かったのは、「一般向けのからだ・病気の解説」が 34 冊、「医学事典」が 24 冊、「健康」が 19 冊、「食事・栄養」が 18 冊であった。

病気別では「がん」が 47 冊と最も多かったが、ほかの病気・診療科は回答が分かれた。

また、医療情報を提供している施設を対象にアンケートをとったが、「読み物・漫画」も 23 冊と多く見られた。

具体的に回答が多かった書籍などについては次章にて分析する。

○よく使われる資料（複数回答；同種の資料は同一施設は 1 としてカウント；回答数 19 施設）

パンフレット	9
食事	3
がん	2
ロハス・メディカル	2
骨粗しょう症	2
パソコン・インターネット	7
ビデオ・DVD	5
オリジナル	3
患者会資料	4
職員用図書室の資料	1

この項目については、同一施設で同じ種類の複数回答がある場合（例：パンフレットが 3 つ、など）は 1 としてカウントした。施設ごとに同じ種類の複数回答が多かったためである。

最も多く見られた資料はパンフレットで 9 施設であった。次にインターネットを中心としたパソコンの利用が 5 施設、患者会資料が 4 施設、と続いた。「オリジナル」とは病院の広報誌など病院独自の資料である。

#### 4. 考察

※以降、患者・市民に医療情報を提供している施設（主に医療施設内における）を総称して「患者情報室」と記述する。

##### a. 「患者の声」が生かされた患者情報室の運営をめざして—医学書の選書から考える—

大阪厚生年金病院 患者情報室ラヴェンダー 司書

特定非営利法人 医療機関内図書サービス ito

中馬良子

患者情報室で活動していながら常日頃思うのは、医療に患者の声が生かされることが注目されるようになっている<sup>2</sup>中で、「患者の声」が患者情報室に生かされているのか、ということである。

一般的な図書館で考えてみるならば、「利用者の声」が図書館の運営に反映されている場合は、棚におかれている資料からその「声」を感じることができる。

例えば、「サラリーマンがよく利用する図書館であれば、ビジネス書が多い」「こどもの多いニュータウンの中にある図書館であれば児童書が充実している」という様に、利用者のニーズが棚に表れる。また、特定のテーマの資料を集め、魅力ある蔵書にするための努力をしている図書館もある。こちらも例をあげるならば、地元ゆかりのある作家の資料を集める公共図書館や、ある特定のテーマに関する資料を集める大学図書館などである。

つまり、蔵書を見るということは利用者の声やその図書館の運営力をみる事ができると考えられる。

さて、今回の調査結果から患者の声が患者情報室の棚に反映されているのかどうかを検討するために、「予算」「寄贈・リクエスト」の項目並びに自由記述欄から考察した。

結論としては、「患者の声が患者情報室の資料構築に生かされているとは言い難い」ものであった。

理由としては、3つ考えられる。

##### ①寄贈・リクエストを受け入れている患者情報室が少ない

寄贈については、「受け付けている」という施設の数 36 (92%) を見ると多いように思われるが、その中には、「医療従事者から受けた医療書の寄贈」については「受け入れる」が、「利用者（患者）からの寄贈」については一般書のみ受け付けているという施設が含まれていた。また、利用者（患者）から医学書の寄贈を受け付けたときには、「該当科部長の検閲」や「医師・専門分野の方に一任」や「闘病記は受け付けない」など、資料の状態（破損・汚れ）ではなく、内容によっては受け入れないと答えた施設もあることから、「寄贈を受け付けている」といっても、その資料が結局「受け入れられない」可能性もあるのではないかと推測される。

購入希望資料のリクエストについては、「受け付けている」が 20 施設 (51%)、「受け付

<sup>2</sup> 『患者の声を医療に生かす』（大熊由紀子、開原成允、服部洋一；医学書院；2006）

けていない」が17施設(44%)で意見が半々である。しかし、「受け付けている」と答えた施設でも、「リクエストには内容にあう本をこちらが選定している」、「内容で選別」という意見が「受け付けている」の中に含まれていることから、患者が希望したリクエストがそのまま反映されているとは言い難い点もあった。

## ②本の選定者に患者が入っていないこと

「患者情報室の本の選定は誰がしているのか」という問いに対して、患者と答えた施設はなく、患者が入っていない運営委員会が主として資料の選定をしているという本調査結果から考察すると、医師や看護師や司書らによる医療従事者側よって資料の選定がなされているということが言えるだろう。

本調査では、「患者」という選択肢がなかったということも記述のなかった理由であるとも考えられるので、今後更に調査をしたい。

## ③予算が確立されていないこと

予算については、「ない」、「その都度必要に応じて」、「医療機関内の病院図書室の図書費用を充てる」、というパターンが浮かび上がった。

患者情報室だけの予算を持っている施設もいくつか見られたが少数である(4施設)。

「その都度必要に応じて」という予算は曖昧であり、患者情報室の常駐スタッフがその必要性をいかに伝えるか、という運営能力によるところが大きいと思われるが、別の調査<sup>3</sup>によれば、常駐スタッフをおいている患者情報室は少ないというデータもある。どのように利用者の意見を汲み上げ、資料を選び、予算を取ってきているのか、また、十分な予算獲得ができてきているのかは疑問である。

本調査では、患者情報室の担当スタッフ(ボランティアも含めて)が患者の意見を汲み取る方法についてまでは問を設けていなかったため、今後の研究課題にしたい。

以上のことから、患者情報室の資料は院内の医療従事者からの寄贈に頼っている施設が多いのではないかと推測できる。つまり、利用者の意見が反映された棚ではなく、その施設の医療従事者の意見が反映された棚となっているのではないだろうか。

結局のところ、「患者中心医療の線路上にあるはずの患者情報室」<sup>4</sup>が、患者の意見が取り入れられた患者情報室とは言い難いところも多いと考えられる。

よって、「多くの患者情報室が受け入れている資料≠患者情報室に必要な資料」であり、「多くの患者情報室で利用率が高い資料やジャンル=患者情報室に必要な資料やジャンル」という事になるのではないだろうか。

本研究の結果から、これから患者情報室を立ち上げる医療機関に対して何か助言できるのであれば、患者情報室にそろえたい資料をセレクトする場合、他の患者情報室において利用率が高いものを選ぶこと、また、医療従事者が選んだ資料だけではなく、患者目線で選ばれた資料を購入するということが、患者中心の医療にもつながり、患者情報室設置の

<sup>3</sup>いいなステーションの2005年及び2007年の調査、など

<sup>4</sup>特定非営利活動法人 医療の質に関する研究会 2007年2月10日シンポジウム報告書

本来の役割を果たすのではないかと考えられる。

それを実現させるためには、患者の「声」をきちんと汲み上げるシステム（リクエスト票の設置・常駐スタッフの教育体制、など）をつくること、その「声」に応えるための予算を用意しておくこと、だろう。

また、患者が欲しいと思う資料が出版されているのかも現在は疑問視されるところである。例えば、筆者が担当している患者情報室によく寄せられる問い合わせに、「退院後の生活上の注意点を調べたい」というものがある。しかし、その質問に対して当施設の利用者（患者）が選ぶ資料は、「新聞の医療面」、「闘病記」、「患者団体が発行した資料」などであることが多い。

本調査結果においても「不足している資料は何か」という問いに「患者会資料」という回答が多かったことから、患者が必要としている情報と、出版されている医療情報の内容が一致していない部分もあるということが言えるのではないだろうか。

今後の患者情報室における資料提供のあり方を探るためには、様々な人々との協力が必要であろう。患者が欲しい情報が出版されるためには出版社と患者の協力が必要であり、限られたスペース内で患者が必要とする資料を用意する事を考えると、各病院の患者情報室や、病院スタッフ向けの病院図書室、医学図書館、そして、市民の生活と密接している公共図書館、また、市民の保健環境を支えている保健センター、行政などと連携して、患者に幅広い資料を提供する事も考える必要があるだろう。

## b. 患者情報室に役立つ書籍・資料とは？

いいなステーション いいなプランナー  
池上英隆

この節では、主にアンケートの「よく利用される書籍」及び「よく利用される資料」について考察し、どのような資料が患者情報室に置かれるべきか、ということを検討する。薬に「エッセンシャル・ドラッグ」とも呼ばれる「必須薬」があるように、資料にも「エッセンシャル・ブック」と呼ばれるようなものがあったら良いのではないか、という考えからである。

以降、具体的に書籍名や作者・出版社を挙げることもあるが、アンケートに書籍名しか書かれていなかったものも存在するため、同名の別書籍や発行年の違う別版である可能性もあることをご了承頂きたい。特に記述がない場合は最新の版のものを挙げることにする。また、記述方法は『書籍名』（作者；出版社；発行年）とする。なお、書籍名の頭に\*印が付いているものは今回の回答では挙げられなかったが、参考としてあげた書籍である。

### ①医学辞典（13種類、のべ24冊）

医学辞典で最も多かったのは『家庭医学大全科』（高久史磨；法研；2004）であった（5施設）。「家庭の医学」的な一般向けの医学辞典は『EBM 正しい治療がわかる本』（福井次矢；法研；2003）など、計6種類（のべ13冊）挙げられていた。

次が『メルクマニュアル』(Mark H. Beers(著), 福島雅典(監修); 日経 BP 社; 2006、『家庭版』の場合は 2004) である(3 施設)。専門向けの通常版と一般向けの家庭版があるが、どちらか明記されていないものもあるため同時に集計した。

専門向けの医学辞典としては、『医学大辞典』(伊藤正男, 井村裕夫, 高久史磨; 医学書院; 2003)、『今日の治療指針』(山口徹, 北原光夫, 福井次矢, 相沢好治; 医学書院; 2007) など、6 種類(のべ 8 冊)が挙げられていた。

医学辞典は高価であるため多くを揃えるのは難しいが、「家庭の医学」のような一般向けと専門向けの 2 種類を用意しておくのがよいだろう。

#### ②全般的な病気の解説(専門向け: 5 種類(のべ 12 冊)、一般向け: 14 種類(のべ 37 冊))

ここに含まれる書籍はシリーズのような多くの病気を網羅した書籍や、解剖学など医療の基礎知識に関するものを言うことにする。専門向けと一般向けに分けると専門向けが 5 種類(のべ 12 冊)、一般向けが 13 種類(のべ 34 冊)であった。

専門向けでは『看護のための最新医学講座』(中山書店)シリーズが 6 冊、『標準』(医学書院)シリーズが 3 冊と看護向け、医師向けのそれぞれのスタンダードテキストが選ばれている。また、ジャンルとして「診療ガイドライン」という回答もあった。

一般向けでは『患者さんのためのやさしい疾患の自己管理』(医薬ジャーナル)シリーズが 9 冊、『よくわかる最新医学』(主婦の友社)シリーズが 5 冊、『専門のお医者さんが語る Q&A』(保健同人社)シリーズが 4 冊、『インフォームド・コンセントのための図説』(医薬ジャーナル)シリーズが 3 冊、『読む人間ドック 健康百科』シリーズ(集英社)が 3 冊、と病気の平易な解説を中心としたシリーズのものが多く挙げられている。他には『からだの地図帳』(高橋長雄; 講談社; 1989)、『病気の地図帳』(山口和克; 講談社; 2000)などの『～の地図帳』シリーズが 4 種類(のべ 6 冊)挙げられている。

前述の『インフォームド・コンセントのための図説』(医薬ジャーナル)シリーズや『メディックブック』(水島裕; 金原出版; 第 1 部は 2007、第 2 部は 2006)などは、医師が患者に説明するための資料として作られているので、患者情報室に置くのに適切な本であると言えるかもしれない。

#### ③食事・栄養(16 種類(のべ 20 冊))

食事・栄養の分野では多くの種類の書籍に意見が分かれた。各疾患別(腎臓病のための食事、高血圧の人のための食事、など)の書籍が挙げられていた。唯一複数の施設(5 施設)から記述があったのは女子栄養大学出版部のシリーズであった。具体的には『健康 21 シリーズ ~の人のための食事』(『新健康になるシリーズ』を挙げている施設もあったが現在絶版で、同様のこのシリーズに引き継がれている)が挙げられた。

食事に関しては、後述のパンフレットなどでも需要が多く見られるので、揃えておきたい分野であろう。

#### ④薬(6 種類(のべ 10 冊))

専門向けで挙げられたのは『今日の治療薬』(水島裕, 森田寛; 南江堂; 2007)、『治療薬マニュアル』(関頭(編); 医学書院; 2007)の 2 種類であった。



一般向けで挙げられたのは、『医者からもらった薬がわかる本』（木村繁, 医薬制度研究会; 法研; 2007）、『薬の事典ピルブック』（橘敏也; ソシム; 2007）など3種類であった。

この分野は専門向け、一般向けとも数種類出版されて比較的ラインナップも豊富である。薬剤師などと相談し、施設にあったものをできれば双方とも揃えておいた方が良さそう。

#### ⑤検査（9種類（のべ10冊））

『病院で受ける検査がわかる本』（高木康, 田口進; 法研; 2003）、『病院で受ける検査がわかる事典』（山門実; 成美堂出版; 2003）、『病院の検査がわかる 検査の手引き』（安藤幸夫, 藤田善幸, 真山享; 小学館; 2006）など一般向けの事典形式のものがほとんどであった。

今回は挙げられていなかったが、看護師向け、医師向けのものもニーズによっては検討する余地はあるだろう。

#### ⑥健康（7種類（のべ14冊））

複数の施設から挙げたものは『NHK きょうの健康』（5施設）、『別冊 NHK きょうの健康』（4施設）（以上、日本放送出版協会）、であった。雑誌であるため講読している施設もある。

健康に関する分野は、evidenceに欠けると思われる資料もあるため、司書や専門家による検討もなされる必要があるだろう。

#### ⑦疾患別（種類、冊数は文中に）

疾患別に見ると「がん」が最も多く40種類（のべ47冊）であった。中でも多かったのは『がんサポート』（エビデンス社）、『がん治療最前線』（八峰出版）といった雑誌であった。『ガン再発す』（逸見政孝, 逸見晴恵; 廣濟堂出版; 1994）などの闘病記もいくつか見られた。がんについては各疾患別の資料だけでなく、抗がん剤や放射線などの各治療法、リンパ浮腫などの合併症に関するもの、心理的なケアや家族へのケアなど多角的な情報が必要である。それぞれの分野の書籍を揃えると同時に、『\*がんを生きるガイド』（日経メディカル(編); 日経BP社; 2006）、『\*がんを生き抜く実践プログラム』（NHKがんサポートキャンペーン事務局; 日本放送出版協会; 2005）といった総合的に網羅されている書籍を準備するのも良いと思われる。

その他の疾患では消化器科関連が7種類（のべ7冊）、循環器科関連7種類（のべ7冊）、呼吸器科関連2種類（のべ2冊）、脳神経科関連9種類（のべ9冊）、婦人科関連3種類（のべ3冊）、小児科関連3種類（のべ4冊）、整形外科関連3種類（のべ3冊）、であった。

どの疾患・診療科を取り揃えるかは病院の個性にもよるだろう。がん診療拠点病院であればがん関連のものを、心臓病の手術が多い病院ならば循環器関連のものを、などその病院の「強い」分野を積極的に置くのがよさそう。「強い」分野であれば医師の協力も得られ、資料の収集もしやすいと思われる。公共図書館や総合病院など多くの市民が利用する施設であれば、様々な疾患の書籍を網羅的に置く必要があるだろう。このような施設では地域の他の施設で足りない資料の補完という意味でも、様々な資料を置いておく必要があるだろう。

### ⑧読み物・漫画（17種類（のべ23冊））

今回は医療情報を提供している施設をメインに調査したため、読み物については対象外の予定であったが、多くの施設から回答が寄せられたため、集計をすることにした。

複数の施設から回答があったのは、『生きかた上手』（日野原重明；ユーリーグ；2001）が4施設、『五体不満足』（乙武洋匡；講談社；1998）が3施設、『がんばらない』（鎌田實；集英社；2003）が2施設であった。鎌田氏の書籍は他にも2種類挙げられていた。他にも、『医龍』（乃木坂太郎、永井明；小学館）、『Dr コトー診療所』（山田貴敏；小学館）、『ブラックジャックによろしく』（佐藤秀峰；講談社）、『救急精神病棟』（野村進；講談社；2003）など、医療や福祉、生き方論といったテーマの書籍が目立った。

医療情報をメインに置いている施設では、スペースなどの問題からこのような読み物を置くのは難しいかもしれないが、図書室を併設している場合はこのようなテーマの書籍を積極的に置くのもよいだろう。

### ⑨福祉（3種類（のべ3冊））

福祉分野では『医療・福祉・介護ガイドブック—自己決定のための社会資源情報』（山北勝寛、四方克尚；大学教育出版；2004）（絶版）などが挙げられていた。

福祉制度については、調べられる機会も多いと思われるが、置いている施設は少ないかもしれない。『\*医療福祉総合ガイドブック』（日本医療ソーシャルワーク研究会；医学書院）、『\*すぐに役立つ公費負担医療の実際知識—実例・図解による請求事務マニュアル』（安藤秀雄；医学通信社）などは毎年更新されており、役立つ資料であるだろう。ソーシャルワーカーの部署でこのような書籍は活用されている場合もあり、ソーシャルワーカーは独自の資料を持っている場合も多い。福祉分野ではソーシャルワーカーとの連携が必須であろう。

### ⑩その他の書籍（12種類（のべ12冊））

その他、今までに分類されていない書籍で特筆すべきものを挙げておく。

病院探しに関する本は『患者が決めた！いい病院ランキング 関東版』（オリコンエンタテイメント；オリコンエンタテイメント；2006）の1冊であった。病院に関する本はいわゆる「ランキング本」が多く、「いい病院」の基準がそれぞれ違っているために、病院や公共図書館に置くのには不向きであるのかもしれない。置くのであれば、様々な種類のことを比較検討できるように網羅的に置くか、『\*～病院情報』シリーズ（医事新報）や各医師会の出版している病院・医師名簿など、客観的な情報のみを集めた病院本を置いておくのがよいかもしれない。インターネットでも病院情報は公開される傾向にあるので、インターネットの情報も活用すべきだろう。

患者会に関する本では『全国患者会ガイド』（和田ちひろ；学研；2004）が挙げられている。アンケートの足りない資料の項目でも「患者会資料」というのは挙げられており、このような書籍も患者会に関する情報を得るのには役立つだろう。患者会に関するガイド本は他にも『\*全国患者会障害者団体要覧』（プリメド社「全国患者会障害者団体要覧」編集室；プリメド社；2006）、『\*がん！患者会と相談窓口全ガイド』（いいなステーション（編）；三省堂；2007）などがある。

『入院生活なっとくのQ&A50章』（茨常則；四季社；2004）も挙げられていたが、このような入院生活に関するアドバイスを載せた本も患者・家族にとって役立つだろう。

#### ⑪パンフレット（9施設）

ここからは書籍以外の資料についてよく使われていると回答されたものについて検討する。

パンフレットについて、複数の回答があがったものは食事に関するものとフリーマガジンの『ロハス・メディカル』（㈱ロハスメディア発行）であった。

食事に関するパンフレットでは、写真やレシピを掲載しているものも多く、具体的な情報が得られるため人気がある施設が多いようだ。このようなパンフレットは病院の栄養課にも置いてあること多く、このような部署との連携が必要だろう。

フリーマガジンは『ロハス・メディカル』以外にも『元気読本』（㈱オアシス発行）が挙げられていた。このようなフリーマガジンは病院の待ち時間対策として、外来に置かれている所も多いだろう。冊子によっては、フリー＝無料であるため、健康食品等の広告が多いものもあり、患者情報室に置く際には内容を吟味する必要もあるだろう。

他に挙げられていたパンフレットはがんに関するものがあつた。がん診療拠点病院の相談支援センターで配布されているパンフレットである<sup>5</sup>。他には行政が配布している介護・福祉のパンフレットや、福祉用具メーカー（専門店）が配布しているカタログ、なども挙げられていた。

「パンフレット」といっても、製薬会社、その他の企業、行政、福祉関係、など様々なジャンルのものが挙げられており、このような情報の収集は情報のゲートキーパーとも言える図書館司書の腕の見せ所だろう。

#### ⑫パソコン・インターネット（7施設）

この項目をパソコン・インターネットとしたのは、インターネットに接続できないパソコンと答えた施設があるためである。

インターネットのサイトとしては、国立がんセンターの『がん情報サービス』<sup>6</sup>をはじめとして、がんに関するものが多く見られた（4件）。他には医療に関するポータルサイトや検査値の読み方のサイトが挙げられていた。

施設で独自のリンク集を作っているという回答もあつた。インターネットの情報は膨大であるため、ある程度情報を選別できるものも必要だろう。患者・市民用のパスファインダーや書籍リストを作る試みなども行われており、このような動きは今後も注目していきたい。

#### ⑬ビデオ・DVD（5施設）

---

<sup>5</sup> がん情報サービス内の

[http://ganjoho.ncc.go.jp/public/qa\\_links/brochure/download.html](http://ganjoho.ncc.go.jp/public/qa_links/brochure/download.html) にてダウンロードできる。

<sup>6</sup> <http://ganjoho.ncc.go.jp/public/>

ビデオやDVDなどの視聴覚資料については糖尿病など生活習慣病に関するものと手術に関するものの2種類に主に分けられた。

生活習慣病に関しては患者自身がより理解を深めないと改善が難しい病気なので、理解を深めるために視聴覚教材を使うことは有効であろう。

手術に関しては、患者が手術を受けてもらう前に事前に見てもらい、どのような手術かを理解してもらうというものであった。口頭の「インフォームド・コンセント」だけでは伝わりにくい部分もあるので、映像での「インフォームド・コンセント」を加えることで更なる理解が得られるだろう。

#### ⑭患者会資料（4施設）

患者会資料に関しては、その病院医師が関わる特定の病気に関する患者会のもの、などが挙げられていた。患者会資料については「足りない」と答えた施設も多かったため、まだ十分な資料がないとも考えられる。患者会側も資金等の問題から患者情報室や図書館へのこのような資料提供が難しいということもあるだろう。患者情報室や公共図書館の側でも積極的に、地域や院内の患者会の資料や機関誌、患者会のガイド本、患者会のイベント情報などを、自ら集めていくことも必要だろう。

#### ⑮オリジナル（3施設）

ここで挙げられたものは、院内の診療科に関するファイル、病院の広報誌、などであった。病院の患者情報室であれば、病院の広報の場としても積極的に利用していくことも考えられるだろう。

#### ⑯その他の資料（1施設）

ここでの回答は職員用図書室の雑誌を必要があればコピーするというものであった。職員用図書室と併設されている施設は少ないが、そのような施設ではこのような取り組みは行われているだろう。専門的な雑誌論文を読むためには、患者図書室と職員用図書室を別個にしているような所では両者の連携を、公共図書館であれば大学の医学図書館などとの連携も考えなければならないだろう。また、アメリカのMedlineのように、日本でも医学文献をインターネット上で読めるようにする取り組みも行っていくべきだろう。

#### ○まとめ

今回の調査では調査数も十分とも言えず、調査に協力している施設はそれだけ余裕のある施設であるという偏りも考慮すべきだろう。しかし、逆に言えば、余裕のある施設であるということは、前述の中馬氏の言う「患者の声」を十分に受けることの余裕があるということとも言えるかもしれない。

本調査では医療全体に関する書籍や資料については傾向をある程度発見できたと思われる。各疾患・診療科別に関する具体的な書籍や資料、及び今回の調査で十分な数が得られなかった、患者会資料、パンフレット、インターネットなどの書籍以外の資料についてはこれから更なる研究を重ねる必要があるだろう。

## 5. 謝辞

本調査は特定非営利法人ヘルスケア・リレーションズの助成によって行われました。このような研究の機会を与えて頂いたことをお礼申し上げます。

アンケートにご協力頂いた施設の皆様には、お忙しい中アンケートにお答え頂いたことをありがたく存じます。引き続き研究の機会があれば、ご協力頂ければ幸いです。また、これを機会に各患者図書室・公共図書館、並びに関係施設の皆様と情報交換などできればと思っております。もし、何かございましたら、以下の宛先までご連絡頂ければ幸いです。

研究にご協力頂いた関係者の皆様、ありがとうございました。

**「患者図書室／患者情報室の資料の選定に関する研究」の研究メンバー：**

池上英隆（いいなステーション・いいなプランナー）

北田淳子（阪南中央病院患者情報室とまり木）

中馬良子（大阪厚生年金病院 患者情報室ラヴェンダー 司書、特定非営利法人 医療機関内図書サービス ito）

**この研究に関する連絡先：**

ikegami@e7station.com（いいなステーション・池上英隆）

## 調査内容の詳細

### アンケートの内容について

- ・本用紙は「選書の基準や患者図書室の運営に関するアンケート」と「貴施設の患者図書室／患者情報室の資料の一覧（リスト）について」の回答用紙です。いいなステーションホームページに掲載する患者図書室のデータの回答用紙は別紙になっております。それぞれ、ご回答の上、ikegami@e7station.comまでお送り下さい。

### 選書の基準や患者図書室の運営に関するアンケート

- ・選択肢がある場合は、選択肢に○を付けて下さい。補足説明がある場合は余白にお書き下さい。
- ・自由記述欄はそのまま四角の空白にお書き下さい。書ききれない場合は余白や別紙にお書き下さい。

### 貴施設の患者図書室／患者情報室の資料の一覧（リスト）について

- ・書籍をはじめ、パンフレット、ビデオなど設置しておられる全ての種類の資料についてリストをお送り下さい。
- ・リストを作成していない場合、一部のみの場合はその旨をアンケート用紙に記入の上、ご返信下さい。
- ・職員用の図書室と併設されている場合は、患者用の図書のリストのみで構いません。
- ・メールでの送付は、ワード、エクセル、アクセスのファイルは受け取り可能です。その他のファイルの場合は上記の宛先までご連絡下さい。

### よく利用される資料について

- ・書籍に限らず、パンフレット、ビデオ、Web など利用者がよく利用される資料を回答用紙にお書き下さい。
- ・書籍の場合は作者や出版社、パンフレット、ビデオは発行元、Web の場合は URL など、タイトル以外の情報も分かる範囲でお書き下さい。
- ・お送り頂くリストに分かるように印をつけて頂いても結構です。（赤で印をつける、など）
- ・「よく利用される」の範囲はご担当者様の主観で構いません。貸し出しをされている場合は月に○回以上貸し出しされているもの、パンフレットは月に○枚以上出ているもの、などの基準を決めて頂いても構いません。その際は基準を回答欄にお書き下さい。
- ・書ききれない場合は、余白や裏を利用するか、別の紙をご使用頂いて構いません。備考については分かる範囲で構いません。

## 回答用紙

### 選書の基準や患者図書室の運営に関するアンケート

- ・資料の目録は公開していますか？

1. 全て公開している	2. 一部のみ公開している
3. 作成しているが公開していない	4. 作成していない

- ・本の選定は誰がしていますか？（複数回答可）

1. 司書	2. 医師
3. 担当の委員会	4. その他担当者

【3・4の場合は具体的ににお書き下さい。3に同書、医師が含まれる場合は3のみで可。】

- ・年間予算はどのくらいですか？（「年間」単位でない場合はその旨をお書き下さい。）

--

- ・寄贈は受け付けていますか？（複数回答可）

1. 利用者からの寄贈を受け付けている
2. 病院スタッフ（医師など）からの寄贈を受け付けている
3. 寄贈は受け付けていない。

- ・利用者からのリクエストは受け入れていますか？

1. はい	2. いいえ
-------	--------

【寄贈かリクエストを受けている場合のみお答え下さい】

- ・寄贈やリクエストの受け入れの基準はありますか？ある場合はその基準をお書き下さい

1. はい	2. いいえ
-------	--------

【基準】

- ・不足している資料、補充していきたい資料はどの分野（分類）ですか？

【例：耳鼻科の書籍、医療費に関する資料、など】
-------------------------

**○貴施設の患者図書室／患者情報室の資料の一覧（リスト）について**

送っていただくリストの内容と送付方法はどれですか。いくつかある場合（書籍リストはメールで、パンフレットのリストは郵送で、など）は複数回答も可能です。

- |  |  |
|--|--|
| 1. 紙に印刷したものを郵送                                     |  |
| 2. 電子媒体で郵送（形式は a. エクセル b. ワード c. アクセス d. その他（ ）    |  |
| 3. 電子媒体でメール送付（形式は a. エクセル b. ワード c. アクセス d. その他（ ） |  |
| 4. その他（ ）  |  |

**○よく利用される資料について**

・書籍についてよく利用される本のタイトル（できれば作者・出版社なども）をお書き下さい。

**本のタイトル、備考（作者・出版社、よく読まれている内容など）**  
 例) 全国『患者会』ガイド（作者：和田ちひろ、出版社：学研、がんの患者会がよく調べられている）

--

・書籍以外のものでもよく利用される資料のタイトルと資料媒体をお書き下さい。

**資料のタイトル、備考（媒体、作者、発行元、よく読まれている内容など）**

例) 大腎協定期大会議案書（患者会会報誌、大阪腎臓病患者協議会、透析施設を調べる）

--

・今後の課題や展望についてご自由にお書き下さい。

--

ご協力ありがとうございました。